

大学研究室が実践する小規模での米国短期海外研修の活動に参加した学生の
自己評価、気づき、学びの分析
Analysis of Evaluation and Reflective Comments through Participating in a
Small-scale “Short Study Tour” Program at College

保崎則雄（早稲田大学人間科学学術院）

Norio Hozaki

School of Human Sciences, Waseda University

Abstract: “Short Study Tour” programs are now conducted at many colleges mainly for the purpose of enhancing inter-cultural understanding and L2 (=English) development. The two-week-long U.S. seminar camp, introduced and analyzed in this paper, incorporates a variety academic activities, such as group presentations about Japanese pop and traditional culture, and working as a teaching assistant (TA) in Japanese classes at the host college, as well as visits to a local elementary school, with reflective discussion each evening at the accommodation venue.

Results of questionnaires administered both before and after the camp indicated that L2 development was a high priority for the participants before the seminar camp, and that negotiation skills were what most beneficial as a result of the seminar camp. One of the reflective comments made by the participants emphasized the importance of both determination and perseverance in order to produce sufficient language for interlocutor communication, and to interpret paralinguistic cues.

Key words: short study tour, language development, reflective analysis, collaborative activities

1. はじめに

近年、大学の留学プログラムは、授業科目の一部として参加学生に履修単位を与えるというような留学（黒崎、2011；西原、2015）から、国際ボランティア活動に参加するというような大学のカリキュラム以外のプログラム（八島、2009）などがある。また、設定されたコンピテンス（外国語運用能力、自己管理、成果志向、協調性、異文化理解など）の獲得を目指し、その自己評価を報告するという手法での研究も行われている（中谷・梅村、2013）。高校での留学、海外インターン活動、国際ボランティア活動参加による学びの変化の様相も報告され（土性・保崎、2014；保崎ほか、2015）、海外に拠点を置くNPO活動への参加、ワーキングホリデーを利用した海外での就業経験というものまで存在し、short study tour(短期海外研修)の種類、方法、内容は多岐に渡っている。

比較的短期の留学を終え、日本にリエントリーした学生への聞き取り調査を行った研究では、「帰国後の自分の変化」という項目も指摘されており（ジャフィーほか、2013）、帰国後の変化に関して、PAC分析を基に調査した結果、短期間の海外滞在でも異文化接触を経験したことで、価値観が覆るような体験をしたという報告もされている（渡部、2009）。

また、短期留学のようなプログラムの教育的な意義や、参加者自身の参加態度に関しては、参加者の事後の振り返りの重要性を示唆するものもある（Perry, Stoner & Terrant, 2012）。

現実には、大学を休むことなく、短期で多岐にわたる内容の研修を実施、引率者が実際に学生に寄り添いつつ、活動に参加することによって学生に伝わることも多い（ショーン、2001の言う reflective practitioner）。明確な学習目標のようなものを設定せずに、しかし見通し、観点は提示しつつ、包括的な方向性を示すのみで、個々人が様々な研修地での活動に参加する中で、気づいたり、学んだりすることがどのようなものかということを自省しつつ明らかにすることにも意味があるであろう。

2. 実践の背景

外国語学習、異文化学習等においても、教室での学び（＝教室学習知）が、現実での応用と一致しないことがしばしばある。言語教育での学習と習得（Krashen・Terrell, 1983）でも指摘されているように、日常的な活動の中に学びの要素が埋め込まれており、活動への参加は、理解することを通して主体的になり、その活動に関与しつつ学びのコミュニ

ティの一員となっていくことは重要である (Lave・Wenger, 1991)。

人は、真正性のある状況での活動を経験しつつ学ぶという根幹的な学びの重要性については、古くから、デューイ、レヴィン、ヴィゴツキー、ピアジェ、バフチンらがそれぞれの視点から指摘をしている。これらの考えに共通することは、学びというものは、個人内の変容だけと捉えずに、学びの場である他者を含む環境との対話を通して形成されるものとして捉え、省察を繰り返しつつ、経験を意味付けし、個人としても成長し、その成長がまた向社会的行動につながるという点である。また、さらに外国語教育の分野では、実践経験というのは、言語、文化の習得、学習において大きな意味を持つ。人は、教室における学び (=学校学習知) が、しばしば現実 (=日常経験知) において役に立たなかったり、適切に使用できないことのずれを経験し、わかったつもりを自覚させられることがある (田島, 2010)。真正性のある複雑な状況に自らの身を置きながら実践する問題解決は、教室のような人工的な学びの場とは異なった、現実性、本物であるという緊張感があり、学習者は真剣に活動を試みることにつながる。経験を重ねつつ、関連づけて、省察することは重要である (デューイ、2004)。

加えて、学習知は、自分自身の経験の意味付けをすることによってのみ構築される (Mezirow, 1992) という考え方をベースに、教育的な活動に参加し、そこで学ぶことの意味を自らの経験を成果としての視点ではなく、参加の過程として捉えることが重要であるとされている (Kolb, 1984)。それはかつてレヴィンが指摘した、 $B=f(P, E)$ に説明される、行為が個人と環境とのやり取りで形成されるということでもある。このことは、英国医療福祉系の NPO においてインターン学生として半年間仕事に従事した学生が書いた毎週の英語でのレポートで、仕事を把握、理解することで、周辺的な参加から十全的な参加をするに至ったという報告にも例示されている (土性・保崎, 2014)。

本実践での協働作業は、常に対話がベースになっており、合目的的な活動に参加しつつ、反駁、説得、

合意形成が日常的にグループ員との間で行われつつ、自分の言葉を確認、決定して行くという、所謂バフチンの言う収奪 (appropriation) ということが活動のあちこちに埋め込まれている。

本研修の事前学習としては、毎年5月の合宿 (2泊3日) で映像制作合宿を行い、発表資料をより効果的に作成することを学んでいる。また、出発前の8月には、英語でのプレゼンテーションの練習を2回実施している。

本研究の目的は、参加学生が、英語 (L2) 環境で諸活動を行い、研修という学びの場に参加することにおいて、何に気づくのか、あるいは学ぶのかということ进行を明らかにする事である。研修準備段階から、現地での活動、事後の振り返りの評価まで、問題解決、グループ内での合意形成などが活動との関係で自分にとってどのような意味を持つのかということ、事前事後のアンケートを基にして明らかにする。

同時に、当該研修という教育実践活動に参加することの満足というものがどのような活動内容と関連しているのかということ进行を明らかにし、このような活動を次年度以降さらに充実させることも狙いである。

3. 方法

3.1 調査対象者：大学3年生 34名

(男 14名、女 20名 平均 21.03 才 SD 0.75)

3.2 研修の実施時期：毎年9月

3.3 研修概要：

実施期間：9月に 10 日間前後

実施場所：米国

研修前半、 オハイオ州の大学

研修後半、 マサチューセッツ州ボストン

① 研修前半の活動 (オハイオ州)

- 1) 日本文化についてのトピックを日本語クラス、文化クラスにて英語でプレゼンテーションを数回行う (5~15分/回)。普段当たり前のこととして、強く意識していないような日本文化の紹介を英語で伝えることによって認識を新たにすることが狙いである。
- 2) 日本語クラスに2、3人ずつ入って TA (Teaching Assistant) としてペア、グループでの会話練習など

の活動をし、外国語としての日本語教育に参加しつつ、理解する。

3) 大学のミニ講義を受け、質問し、コメントを述べる。毎年、「米国開拓史」の授業を研修先の教員から受け、加えて「大学教育における ICT の活用」の特別講義も組んでもらっている。米国大学での授業参加を「普通ごと」にするという狙いがある。

4) 現地の IB 認定小学校を見学し、質問をする。日本とは異なった 10 の学習理念（探究、知識、思考、コミュニケーション、信念、心を開く、思いやり、挑戦、バランス、振り返り）を理解する。

② 後半の活動（マサチューセッツ州）

後半の研修は、事前に個人が興味を持ち、調べ学習をしたものをベースに行う。現地ボストンでは、自分の責任において個人、あるいはペア、グループで行動する。

1) 研修前半の講義で学んだ内容に関連して、米国開拓時代からの歴史的な施設などを見学する。目的は米国独立前の時代の様子を、現地で体感することである。

2) Dartmouth College（ニューハンプシャー州）にて日本語クラスを見学し、授業に参加する。まったくの受講生となって出席し、受講生視点での体験が主な目的である。

3) 現地の家庭に終日入り、指導を受けつつ、典型的な Thanksgiving dinner に参加する。歴史的な感謝祭の意味を、入植者視点と、侵入された人の立場、つまりネイティブアメリカンの被侵略者からの評価、同時に食材の歴史などを、実際に料理を作って味わうことが主な目的である。

3.4 調査方法

研修 1、2 週間前と研修後帰国して 1 週目に、研修参加学生に、同じ内容のアンケートを実施した。質問は 14 項目あり、1～5 の五段階尺度評価を用いた。研修前は「研修で学ぶと思われることは何だと思えるか」という聞き方とその理由（自由記述で 1～2 行）を記述してもらい、帰国後には、「研修で学んだと思う事」とその理由を 1～2 行で記述してもらった。

質問内容は、言語習得、文化理解、自分自身、プレゼンテーションの仕方、団体行動についてなどについてである。

3.5 分析方法

本研究では、分析 1 として、統計的な分析（対応のある t 検定）を行い、研修前と後の自己評価の違いを調べ、さらに分析 2 では、「研修の満足」がどのような研修の内容と関連しているのかということ、重回帰分析を用いて調べた。

4. 結果と考察

4.1 分析 1 「研修前後の学びの相違」

両群（事前-事後）の分析の結果、有意な差が見られた項目を中心に、分析、考察する。

参考までに、両群間で有意な差が検出されなかった項目は、英語使用、団体行動、プレゼンの仕方、異文化交流、現地の人への接し方、マナー、交渉、時間感覚、日本人について、コミュニケーション力であった。

まず、質問 5 の「現地の習慣、文化、歴史について」は、事前の評定平均値 3.7⇒事後の評定平均値 4.3 ($t=3.2$ $df=33$ $p=.003$) となっている。参加学生 A のコメントでは、「アメリカに住んでいるときちゃんと交流をしたことがない」という考えが、事後、「アメリカ人の母国の歴史に対する態度が学べ、同時にアメリカでは自分が動いていかなければ生きていけないのかもしれない」と振り返っている。また学生 B は、「資料等である程度は知る事ができるだろう」という事前のコメントが、研修後「実際に歴史的なものを観て、現地の人と関わることができた」という実体験の重要性に触れている。書物からの学びと実際の状況で経験をし、学ぶことの違いは内容と、深さの点で異なっているということを示していると考えられる。

次に、質問 6 の「米国学生気質、行動について」という項目では、事前の評定平均値 3.6⇒事後の評定平均値 4.1 ($t=2.5$ $df=33$ $p=.019$) と変化した。

研修前には、学生 C の研修後のコメントでは、「現地学生の大学に対する考え方が全く違った」、学生 D は、「明らかに日本より学業に対するモチベ

ーション、ベクトルが違ふと感じた」と述べている。この変化は、普段映画、メディアで知る米国学生気質というものは、頭ではある程度見聞きしてわかったつもりであっても、いざ実践の場で自分が参加しつつ経験すると異なって感じるということであろう。本研修で活動をする米国中西部の平均的な米国人学生の理解とのギャップはあったと思われる。実際、アメリカ中西部の平均的な大学生と多くの交流を経験して気づいたということである。

質問7の「物価、金銭感覚について」という項目では、米国での買い物を通して、実際の物価と米国人の金銭感覚を目の当たりにして気づいたことも多いということであろう。事前の評定平均値 3.0⇒研修後は3.7 (t=3.4 df=33 p=.002) となった。事前のコメントでは、何名も日本とあまり変わらないだろう、あまり気にならないだろうと述べていたのが、事後は、学生 E「いくつかの地域を回ったので物価についてはかなり学べた」、学生 F「何回もの地元のスーパーでの買い物などで学んだ」と述べている。スーパーでのクーポン券の多用、交渉の様子などからでも学ぶことは多かったということが言える。このようなことは些細なことではあるが、実際に自分が毎日の買い物で現地通貨を使用し、また他の人の言動を観察し、体験してみて初めて気づく点であることである。

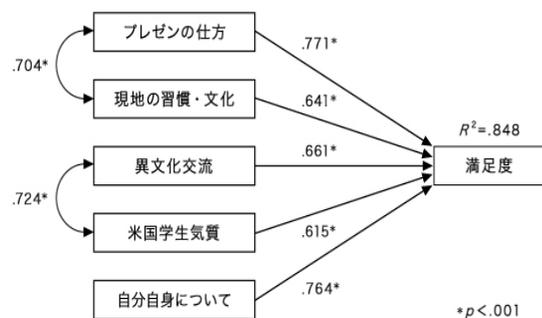
さらに、質問12「自分自身について」という項目では、(事前の評定平均値 3.8⇒評定平均 4.4) (t=3.0 df=33 p=.005) の研修前のコメントでは、「新たな価値観が身に付きそうです」「自分をもっと出し、目立つようにしようと思う」が、研修後の振り返りでは「海外という異空間にいたことで自分に不足している点が見えたと思う」「自分の興味ある分野が明確になった」と具体的な内容のコメントになっている。参加学生は、全体として時間配分、移動のクラスなどの情報を共有し、かつ、発表時には同じ方向を見つ、効果的な伝えをし、まとめあげるという活動に、ひとりひとりが関わる。このような、グループ単位で寝食を共にする学術的協働作業は皆初めて経験する。そして、自分の性格、行動を仲間目、言葉を通して認識する、自覚させ

られる、あるいは指摘されるということが多かったようである。グループ内の学生で英語力があつたり、海外在住経験のある学生が、未経験の学生に教えたり、また在外経験の浅い学生が、経験者の言動から学び取ったりということも毎年観察される。

4.2 分析2「研修の満足度」

この分析では、視点を変えて、本研修に対する満足度を目的変数として、どのような説明変数が有意な偏回帰を示し、何か特徴的な項目間の相関が見られるのかということをも明らかにするために重回帰分析を用いて調べた(図1参照)。

図1：偏回帰・相関のパス図



比較的高い偏回帰係数 (.600 以上) が認められた項目 (=説明変数) は以下の5つについて考察する。

まず、「プレゼンテーションの仕方」が満足度に対して強い偏回帰 (.771) を示した。このことは、研修前に実施している英語プレゼンテーションのワークショップや、日頃からゼミの活動で行っている、日本語でのプレゼンテーション、メディア制作を重視して、指導も丁寧に行っていることと関連していると思われる。ただ、日本人学生にとって英語で発表するという事までは、ある程度事前練習が可能であるが、その場で突然聞かれること、説明に窮するような文化、慣習に関するような質問に英語で対応することはかなり難しいことである。初めての場所での実践、英語を母語とする学生集団の前での実践、さらに相手校の学生の日本語でのプレゼンテーションを聞く機会を通して、互いの言語でのやり取りで、気がつくことが多いと思われる。それを裏付けるように、研修後のコメントで、「実際にその場

で見ると客観的な判断ができたと思う」「今までのプレゼンは独りよがりのものであった」「プレゼンは臨機応変に対応すること、瞬発力も大事」というようなコメントにも学びが表れている。

実際に、異なったプレゼンテーションのスタイルを間近に見て、気づく事が研修前の予想よりも多く、そのことが満足できたということにつながっていたということであろう。現地教員が講義で行う映像の効果的な提示、オーディエンス参加型・協力型、日本語の挟み方、表情の豊かさ、大きな動作、資料の提示方法の違いなどを英語での言語活動を通して経験したということである。

次に、「現地の習慣・文化」という項目が万足度にやや強い偏回帰 (.641) を示した。このことは、大学内外での活動、言動が現地でのやり方に根ざしたものであり、そのことは実際に経験を重ね、省察し次の問題解決に向かうということの連続であったことと関連しているのであろう。「**現地ならではの祝い方で食事ができた**」「**現地に関する事前学習は重要**」「**今回の研修を通じて、日本の文化にも強い興味が湧いた**」という事後の振り返りコメントにもこのことが記載されている。

また、「異文化交流」が満足度にやや強く偏回帰していること (.661) については、相手校大学での活動のひとつ、Japan Open House 活動時にもその場でデモンストレーションをするような習字、けん玉、駄菓子食べ方、マンガの紹介などの活動を通して伝え方の交流のような場面も見られたことが「異文化交流」の満足度につながる結果に表れていると考えられる。「**欧米とアジアの違いを感じた**」「**日本のことに興味を持ってくれて嬉しかった**」「**日本の文化を伝えられてよかった**」「**実際の場所で聞いた話が有意義だった (プリマスでのメイフラワー号と当時のモデル農場の見学)**」

実際に、おつりの計算の仕方が異なることや、就職に関する意識の違いなどについても、日本人学生が、驚くこともしばしばであった。

次に、「米国学生気質」を間近に観る時間が長く、またキャンパスでのさりげない様子や彼らとの関わり、会話、諸活動を目にし、共にしたようなことが、

理解を深めることにつながり、それが満足度に反映されていると考えられる (.615)。「**歩く歩幅が広く、自信を感じた**」「**学生の大学に対する考え方が全く違うように感じた**」「**積極的に発言、質問する姿には私たちも学ぶべきだと思った**」

やはりこのようなことでも、経験を通しての気づき、学び、経験をつなげるような学びの意味付け(デューイ、2004)ということが生起されたと推測される。

一方、「自分自身について」という項目が研修参加の満足とかなり強い偏回帰 (.764) となって表れた。研修を通じて毎日自分の言動、性格について気づかされ、研修後にはそれが満足したという評価につながっていることが非常に興味深い。学びの深さと同様に、自分自身について再発見したり、気づかされたりしたことが、研修参加の満足度に強くつながっているということは日本にいてはなかなか気づかず、また経験もできないことかもしれない。事後のコメントでは、「**集団行動を通して、自分に足りないものが何か様々な場面で痛感した**」「**他人の話を聞き、インスパイアされた**」「**自分がどういう人間であるのかわかった**」「**興味を持ったことは取り敢えずでもチャレンジしてみようと思った**」「**海外で自分ができるとできないことが分かったような気がする**」「**アメリカが自分に合っているように思った**」というような発言があって、自分を見つめ直したことが指摘されている。

実際には差別されるようなこともこの研修で経験する。そのようなときに、自分のアイデンティティを考え、確認し、米国人に対するだけでなく、同行の仲間と「**自分が周りと異なっていること**」を生まれて初めて意識させられる。日本人だから同じ、という解釈ではなく、お互いが個々の性格、判断、価値観を持っていることが再認識された。このようなことは、実践活動をしながらか省察する活動として意味を持つ。

5. おわりに

本稿では、現在実施している短期米国協働研修に参加した学生が学ぶであろうということの予想と研

修後の振り返りについて分析し、報告した。具体的には、毎年研究室に配属される3年ゼミ生を対象として、一研究室という比較的小規模、少人数の大学生グループが、毎年過去4年間に渡って、教育実践活動として、短期間、10日間程度の米国研修に参加して様々な気づき、学びを経験してきたことの分析である。

参加学生は問題が起こる度に、共同でことにあたり、ひとりで四苦八苦したりと様々な経験をした。その多くが英語使用環境での自分のコミュニケーション力や、プレゼンテーションの技術などに関連している実践でもあり、気づき、学びも多かった。

今後の課題としては、活動内容の適切性を増しつつ、研修の実施を積み重ねていきたいと考える。また、事後の振り返り、自己評価の分析を今後も継続して実施し、毎年参加者数を加えてさらに分析を深めることも課題である。

付記：本研究の一部は、平成24～26年度科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号24520713)を受けて行われた。

参考文献

- [1] 黒崎真由美(2011). 「3ヶ月留学実施における教育的意義について」 『湘北紀要』 第32号 143-154.
- [2] ジャフィー・ポール・富岡美和子(2013). 「リエントリーショック 帰国後も成功する留学に向けて～」 『龍谷大学国際センター研究年報』 第22号 15-30.
- [3] ショーン・ドナルド(2001). 専門家の知恵 ゆみる出版
- [4] 田島充士(2010). 「わかったつもり」のしくみを探る ナカニシヤ出版
- [5] デューイ・ジョン(2004). 経験と教育 講談社学術文庫 1680
- [6] 土性香那実、保崎則雄(2014). 「大学生のStudy Abroadで身につく力とその発生の分析」 『外国語教育メディア学会第54回全国研究大会』 80-81.
- [7] 西原明希(2015). 「学生主体型海外事情プログラム：企業人交流会企画等を通じた異文化コミュニケーション能力育成の試み」 『北星論集』 第52巻 第2号 103-111.
- [8] 中谷礼美、梅村尚子(2013). 「海外体験学習における学びの質的变化を促すコンピテンシー評価の有効性」 広島大学国際センター紀要 第4号 15-28.
- [9] 保崎則雄、長濱 澄、土性香那実、若山修也、藤城晴佳(2015). 「様々な内容、目的を持ったStudy abroadの広がりとそのから得られる学び、課題について」 第21回大学教育研究フォーラム発表論文集 340-341.
- [10] 八島智子(2009). 「海外研修による英語情意要因の変化：国際ボランティア活動の場合」 『JACET Journal』, 49, 57-69.
- [11] 渡部留美(2009). 「短期海外研修プログラムにおける参加者の体験と意識変容-参加者に対するPAC分析の結果より-」 『大阪大学留学生センター研究論集』 第13号 15-30.
- [12] Kolb, D. A. (1984). *Experiential learning. Experience as the source of learning and development.* Prentice Hall
- [13] Krashen, S. & Terrell, D. (1983). *The Natural Approach: Language acquisition in the classroom.* Alemany press.
- [14] Lave, J. and Wenger, E. (1991). *Situated learning. Legitimate peripheral participation.* Cambridge University Press.
- [15] Mezirow, J. (1991). *Transformative dimensions of Adult Learning.* San Francisco. Jossey-Bass Publishers
- [16] Perry, L., Stoner, L., & Tarrant, M. (2012). More than a vacation: Short-term study abroad as a critically reflective, transformative learning experience. *Creative Education, 3(5), 679-683.*